

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 王建新 Wang Jianxin

王建新氏の論文は、中国新疆ウイグル自治区トゥルフアン地域で、1991年より1998年の間、通算6回、20ヶ月にわたって行われたフィールドワークにもとづき、ウイグル族ムスリムの信仰と実践、またとりわけイスラームの学識をもつ指導者層、すなわちイスラームの師が果たしている役割を描く詳細で情報量の高い民族誌である。論文は、トゥルフアン地域の町と村における人々の日常生活の観察と会話、個々のイスラームの師からのライフ・ヒストリーをふくむ詳細な聞き取りを主要な方法としているが、さらにモスクにおける訓話の記録、イスラームの生活倫理を説いた手作りの詩文テキスト本、イスラームの師たちが所持し使用する儀礼上のマニュアル、中華民国時代のイスラーム寄宿学校の史料などを豊富に利用することによって、記述と議論に深みと説得性を与えている。

ウイグル族のイスラームのあり方をめぐっては、過去の時代について豊富な歴史研究が存在する。だが今日のその姿をあつかった文化人類学やフォークロア分野の先行研究は、現地で刊行されたウイグル語によるもの2点、アメリカで刊行された英語のもの1点を数えるのみで、まだほとんど未開拓な研究領域である。したがって本論文は、中国におけるイスラーム、あるいは中央アジア地域のイスラームをめぐる研究上の欠を埋める重要な貢献となるものである。民族誌的データの量と質について言うなら、本論文は博士論文として要求されるべき水準を十二分に満たしている。王君本人は漢族であるが、自分の母語ではないウイグル語を駆使して長期のフィールドワークを行い、ウイグル語文書資料も収集・利用し、現場での観察聞き取りと文書による研究を巧みに総合している点は、とくに称賛に値するもので、文化人類学、中央アジアないし中国の地域研究、イスラーム諸社会の比較研究などの各専門分野への学術上の貢献を十分に果たしている。さらに文化人類学上のイスラーム研究、あるいはムスリム社会研究という面では、次の二点の貢献を果たすものである。第一は、イスラームは地域的にきわめて多様であり単一のイスラームの存在を前提にした研究は成り立ちがたいという、しばしば主張される見解に反対し、イスラームの宗教としての単一性と各地のムスリム社会の歴史的・文化的多様性とのあいだの流動的でダイナミックな関係を問題にすべきであると、明確な提起を行い、トゥルフアン地域の事例によってその主張を十分に裏付けていることである、第二は、トルファン地

域において、イスラームの師は単にイスラームについての知識を民衆に伝えるのではなく、さまざまな地方的・民衆的慣行に対してイスラーム的な解釈と形を与え、そのことによって民衆の生活実践の中へのイスラームの浸透を可能にしているのだという筆者の主張である。

論文は単に現在のウイグルにおけるイスラームの姿を論ずるだけではなく、オーラル・ヒストリーの方法をもちいて、中華民国時代、共産党の人民民主主義革命から文化大革命に至る時期、開放・改革の時代である現在にわたる、イスラームの知的リーダーシップの持続性と変容を明らかにしている。第2章においては、中華民国時代における富農家族の一人の少年の生い立ち、村における最初のイスラーム学習、イスラーム寄宿学校への入学と勉学の経緯が生き生きと描かれ、貴重な記録を提供している。第3章では、人民民主主義革命から文化大革命に至る時期の民衆の生活と、共産党政府によってしだいに押さえつけられていくイスラームの苦境が、克明に記されている。第4章は、文革期に破壊され地下に潜るように生きていたイスラームが、中華民国期に教育を受けた高齢のイスラーム知識層の努力によって再興していく状況を示している。第5章は、現在のトルファン地域で、地方の共産党下級幹部とイスラーム指導層とが、現実の社会秩序を支える上でどのような分業関係にあり、またどのような矛盾があるのかが、明らかにされる。またこの章は、今日の共産党政府のイスラーム政策がどのようなものであり、地方においてそれがどのように実現されているかを明らかにする。以上が地域のイスラームの現代史であるとするなら、つづく6つの章は現在のムスリムたちのイスラーム信仰と実践の諸相を描くものである。第6章では民衆レベルでのイスラームの知識の基本的あり方が語られている。第7章は、イスラームの師たちの通過儀礼への関わりを描き、それによってイスラームの知識と倫理がいかに民衆の暮らしの中に浸透していくのかを示している。第8章は治病儀礼へのイスラームの師の関わりを、第9章はモスクにおける訓話の具体的内容とそれが果たす効果を論じている。第10章では聖者廟のさまざまな事例が詳述され、聖者信仰のウイグルのムスリムにとっての意味が明らかにされる。第11章はメッカへの巡礼、外部のムスリム諸社会とのつながりを論じている。以上に、先行研究との関わりにおける本論文の目標と視角を示した序章、最後の結論を提示する終章を加えた12の章は、たくみで一貫した構成をなしており、対象の記述、議論の展開は平明で明快である。また補遺には、民衆のためにイスラーム倫理を説く49頁、99節より成る詩文テキストの全文が、ウイグル語原文と筆者による英訳を合わせ掲載されている。これは、今後さまざまな専門分野において重要なテキストとなりうるものである。本論文は文化人類学、イスラーム学、中国研究、中央アジア研究の諸分野において、無視することのできない文献となるであろう。したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。